



HOSEI SPORTS INFORMATION MAIL MAGAZINE

法政スポーツインフォメーション
メールマガジン

もとう 毛藤 隼一郎 監督 プロフィール

東京都出身。2006年法政大学文学部哲学科卒業。2017年コーチ、その後副監督を経て、2024年11月監督就任。仕事はインフラ（高速道路）に関わるSE（システムエンジニア）。

ワンゲル部の活動

「ワンゲルは競技スポーツではありませんが、合宿が競技でいうところの試合や大会に相当します。合宿は本番の夏合宿（縦走）などへ向けての経験を積む機会であり、経験を積むためにはやはり回数を増やすことになります。合宿は年間 60～70 日位になります」
「部として、登山・冬季のバックカントリースキーを中心に、自転車・沢登り・島歩きなど自然をフィールドにした活動を幅広く行っています。原則として男女全員が同じことをやるのですが、部員数の関係で、夏季はグループを分けて行うこともあります」
「代が替わる度、代方針を決め、それをもとに部員が自主性・自律性をもって日々活動しています」
「週4回のトレーニングと部会があり、火曜日は市ヶ谷、水曜日は多摩。土曜日の夕方は全員が出席する部会をやります。合宿に監督やコーチが常同できる機会は限られているので、部会は非常に大切だと思っています」と伺い、部会の内容に興味があった。



「ワンダーフォーゲルのフィールドは無限大」

～ “チームで成し遂げる” 意識が支えるワンゲル部 ～

ワンダーフォーゲル部（以下ワンゲル部）は体育会にあって競技スポーツではないため戦績はない。あるのは、目の前のフィールド、自分との闘い、そして仲間。2024年には2回目となるアラスカ遠征という金字塔を打ち立てたワンゲル部の素顔を知りたくて、毛藤監督にお話を伺った。

まず、ご自身の体験も踏まえ、ワンゲル部の活動をお尋ねした。「大学入学まで、ワンゲルの経験はありませんでしたが、元々アウトドアが好きでした。入学時、一人で歩いていた時に声を掛けられ、部の存在を知り入部しました」 人生の転機は、突然訪れるらしい。「ワンゲルはアウトドアのイメージで、“キャンプや自然が好き” “家族との楽しい思い出がある” ことで入部する人が多いのですが、実際には体育会としてしっかり活動しており、私自身もそうでしたが、思っていたものとのギャップが大きかったりします」

「入部者の約半数は、本格的な山登りの未経験者です。入部後は日帰り山行や新人歓迎合宿で体力を鍛え、3ヶ月後の6月に新人修練合宿を行い、本格的な登山の基礎を学びます。私の入部当時は1週間近い合宿で 30 キロ位の荷物を背負っての歩行や、土砂降りの中を歩き、辛かった思い出があります。今は、合宿の内容や指導方法も変わってきていますが、山に対する考え方は同じです」

「山岳部は垂直志向で切り立った上を目指します。これに対しワンゲル部は水平志向で、遠くまで、長く時間をかけて皆で行く活動だと思っています」「全員で計画して全員で行く。そのために日々の活動を皆でやり、各自の性格などもお互いに共有する。そうしたことも考えて活動して欲しい、との思いを部員には伝えています」

部存続の危機を乗り越え

「今年度、部員は男子 22 名・女子 5 名の 27 名です。文・理系とも在籍しています」「ワンゲル部には推薦入学制度がなく、4 月の新入生歓迎会で募集します。現在、部員数は増加傾向にあります。コロナ渦前の 2019 年には在籍者が 4 名という、存続が危ぶまれる時期がありました。そのため、この年には OBOG が新入生にピラを配り、興味のある学生をブースへ案内して現役部員が説明するなど、現役・卒業生が一体となった勧誘活動を行いました」「プロモーション映像や SNS による紹介なども用いた取り組みで、徐々に部員が増える結果となりました」

気持ちは上昇志向

「ワンダーフォーゲルとはドイツ語で“渡り鳥”という意味です。それは“みんなで楽しむ、しかもマイペースで”といった考えになります。そのため、記録や対戦結果などの形がないワンゲル部は、体育会としてどこを突き詰めるべきなのか、悩むところです」「ただ、他の体育会と同様、“常に上を目指す”という基本姿勢はワンゲル部にもあると思います」

貴重な組織運営の経験

「ワンゲルは生涯スポーツですが、体育会のワンゲル活動は 4 年で完結する大学スポーツです。基本的には、学生主体での自立的な活動で、計画に対しても監督・コーチは助言的な立場に徹しています。自分達で切り開くという形を重視しています」「自分達で考えやっているの、こういった時には何が必要かということは結構身に付きます。また、ワンゲル部という小さな組織の中で、会社でいえば新入社員から始まり、リーダー、マネジャー、最後には責任者になるという体験が全部できるようなものなので、社会に出てもこの経験は役立つと考えています」

安全は、リスクの“見える化”がもたらす

2024 年には、アラスカ遠征を実施。その成果に対し、体育会卒業生を送る会では他部のオリンピックなどと共に表彰を受けた。

「前年 10 月に部員から企画書の提出があり、スタートしました。実施日を 2024 年 8 月と定め、いつまでに何をするかというスケジュールに則り準備をしました。計画では登山道(トレイル)だけでなく、「オフトレイル」といわれる道なき道も、地図やコンパスを駆使して進みます。学生は気持ちがはやりませんが、私たちは、安全面が非常に心配になります」「この不安を解決するため、毎週の部会の中で、不安やモヤモヤしたものを見える形にしよう、つまり“見える化”をしていきました」仕事にも通じる考え方である。

「例えば遠征先のランゲル・セントエライアス国立公園内では過去にこういった事故が起きたのか。その中にはグリズリー(動物)の事故もありますが、部員が現地と綿密にやり取りして調べ上げ、それに対する対策・解決策を提示し、“だから大丈夫”という説明がありました」「こうした形で漠然とした不安を見える形にして、一つひとつ解決していきました。ただ、これはアラスカに限らず全てに当てはまることです」3 週間の日程で、参加部員は 6 名。テント泊なので荷物は 100ℓ のザックで 40kg 程。それでも食料は足りなくなるのでセスナ機を利用し折り返し地点までレンジャーが運んだという。

「行動はほぼ予定通りに進み、道中、焚火をしたり魚を獲って焼いたりして食べていました。当然、現地のルールに従っての行動です。今は GPS など便利な機器があり、現地でサポートする部員からも随時連絡が入るので、日本にいても様子は分かるようになっていきます」「帰ってきた彼らを見て、達成感というものもありました。そして、やはり、みんなやせたなと思いました」

体育会監督としてのワンゲル部についても伺った。「部として“皆でやる”ことを大切にしています。例えば、現地集合・現地解散ではなく、遠回りになったとしても大学からスタートする。“これから行く山はこういう山だ”という話を上級生が下級生にしながら移動するとか、そういう所から大事にして欲しいなと思っています」「日頃の活動についても同様です。“LINE を見て、やっておいてね”と上級生から 1 年生に指導しても、経験の浅い 1 年生が正確に理解できるかどうかは分かりません。結果、何かのトラブルが起きかねないので、出来るだけ皆で会う時間や接する時間を増やす、という考えでやって欲しいという話をしています」生命の危険に遭遇する可能性がある部活動だけに、大切な考え方だと感じた。コミュニケーション力の向上にも繋がるに違いない。

「学生と一緒に山に行き、山の中で部員と今後の活動について語り合いたい」と毛藤監督。「あまり表に出る部ではありませんが、体育会にワンゲル部があることを知っていただき、活動が評価され注目されることで学生は育つので、ぜひ応援をお願いします」とも。学生に対して敬語で話すという監督の姿から、学生に対するリスペクト、そしてワンゲルに対する深い愛情を感じたインタビューだった。



夏合宿の一コマ(槍ヶ岳)